

者の僕が、遠い以前から僕を捕えてやまない聖フランチェスコのことを思いやっていたりしたからでもなかったのだろうが、あるいはまた別に卒業論文なるものを提出して、これで一応大学生生活の一区切りがついたからというわけでもなかったのだろうが。全ては昨日までと同じだし、全ては明日からも同じだろう。それでも、やっぱりあの提出日の雪の朝を忘れることはないのかもしれないと思ったりもする。でも夜と朝とが入れ替ってゆくのを眺めながら、ふと僕は一人笑っていた。別に僕の頭が疲労によって腐ったわけではなく、あの白い山並のむこうがもうすっかり雪の中だろうと思うと、何だか急に笑わずにはいられなかったのだ。僕はその時、年の暮れてゆく夜急に雪が見たくなったりして、帰る心算も余裕もなかったくせに、ふと故郷へ帰って行ったことを思い出していた。勿論、雪など降るはずもないという天気予報を僕だって信じていたのだが、何だか急に雪の中を歩いてみたくなったりした。バスに揺られながら、酷く重い僕の頭の中には幾つかの風景がとぎれがちに明滅していった。小さな街灯が浮んできたりもした。その街灯を右に曲がると、あの見慣れた街並がひっそりと眠っているに違いないのだ。永い時の流れを刻み込んだ家並。それは降り積もったばかりの雪を静かに纏っているのがいい。そして幾つかの足跡だけを留めた細い道の両側に長く遠く続いてゆくのだ。僕はその踏み残された純白の上を、両手をポケットに突込みながらゆっくりと歩いてゆくことにしよう。そして時折忘れかけていたように舞い散る雪片に立ち止まりながらも、僕を待つ淡い灯の下へとぎこちなく駆け出してゆくことにしよう。でも、やはり雪は降らなかつた。そして僕も駆け出せなかつた。僕は時が刻まれてゆく中で、珈琲碗の暖もりをこごえた手の平に溶け込ませた。曇った窓硝子を擦っては、眠りかけた思い出を一つ一つ積み

## 卒論についての思い出

社会文化 藤原 成幸

1月6日、やっと卒業論文の清書が終わった。全部で200枚弱の原稿の束を見て思うことは、ただ2つの感情のみ、限りなき充実感と限りなき寂しさ。やっと、ほんとうに終わった。また、これは大学生生活の終わりでもある。

『飛翔』の編集部の人に、卒論についての原稿依

重ねてみたかったのだ。歪んだ幾つかの顔が見えてくる。書きたいことが、書かなくてはならないことが、余りにも多くあったのだ。でも僕はまだ余りにも近すぎる。本当の卒業論文。僕はじっと待っている。夜の河を思い出したりした。夜の公園を思い出したりした。そういえばあの雪の朝の河は美しかった。朝の公園も清清しかった。僕はもう鳩や雀がこの公園にやってくる時刻を知るようにまでなっている。それは僕の暮らした日々を僕に教えてもくれる。でも、もう今は鳩も雀も時をめぐして飛んでってしまった。ほら、もう少年も犬に引っぱられるようにして夕暮れの中を駆け出してゆく。ころばないように気を付けて。僕はまた遠い日のことを考えた。決して立ち竦むのではなく、駆け出してゆくこと。一つの風景の中へと溶け込んでゆくこと。僕もいつの日か少年のように駆け出してゆけるだろうか。僕は遠い日のことを考える。一つの風景の中から僕の言葉を刻み出してゆくこと。駆けてゆく少年の背中が見えなくなる頃、僕はいつもの道を僕の部屋へと歩き出した。

わずかばかりの緑にも  
日だまりと日かげとがある  
.....

いってはならない真実をくわえ  
見なれぬ小鳥がとんでゆく

(K, Rに。)

(追記)

卒論に就いて何か書けということだったので、自由に書かせてもらいました。卒論の内容などということに書く必要の全くない問題や、卒論の動機などという幾ら考えても解るはずのない問題は、全て遠慮させてもらい、卒論を書き終えた後のとりとめもない個人的な感想を書かせてもらいました。尚、詩は小椋桂の「公園に来て」に拠るものです。

頼を受けたのは去年の暮れであった。第一期生である私は、まだこの学部報に一度も自分の意見など載せたことがなかつた。まだまだ自己の意見が中途半端で、だれにも伝える気がしなかつたからである。今回の依頼にしても、シブシブお引き受けしたしだいである。良いものが書けない点は御容赦願いたい。

卒論に関しては、多くの思い出が残っていると言えよう。今終わった時点で考えてみると、学部時代に残し得た唯一のものであったと言っているいいである

う。

卒論の題目設定が決定したのは、3年生の終わり頃であった。それ以前からも、この題目にしようといった考えがあったから、早い時期の決定と言える。その題目は『原子力発電の問題点』である。少しジャーナリスティックな題目であったが、問題点を明確にわかり易くするためには、それで構わないと思った。(この題目については、卒論に書いたことであるが、主に私が広島出身であることと、私達が入学した時がエネルギー危機である所による。)

本格的な資料集めに入ったのは、4年生になったと同時だった。まず参考文献となり得るもので手に入るものは買いあさった。購入できないもので重要なものはコピーをした。その他、新聞記事の切り抜きを少し前から始めていたので、約1年分の切り抜き記事を持つに至った。おかげで、卒論にはかなりの金額をかけることとなった。

本文の構想は、資料集めの途中から始めることになった。各章ごとにどれだけの資料が集められるかによって、章を完成させていこうと考え、章題目を決定したのである。最終的に、下書きの時期までに十数章の題で集めていき、数が少ないものはそれと似かよった所に編入してゆき、資料が集められないものは廃棄していった。その結果、約十章の区分が出来ることになった。

10月頃から下書きを始めてゆき、一応完成させる目的で、前へ前へとふり向くことなく書いていった。一応完成したのが11月の初めで、それから修正を始めた。その修正が終わったのが、だいたい11月の終わりであった。指導教官に提出し、修正していただきパスしたのが、昨年の、冬休みに入る時であり、その後清書にとりかかったが、10月以降は毎日卒論だけに終始した。

私の場合は、以上のような経過をたどって卒業論文を完成させたのであるが、今その反省をすれば、後悔だけが残るのである。その理由は、自分としては一応立派なものを仕上げたい気持ちで計画をたてて行動してゆくのであるが、資料がそろわない所が現われてくるし、またその資料の信憑性が問題となってくる。特に私の題目のような研究では、自然科学に対しての依存が非常に大きく、社会科学的地見地では、資料を信じて使わなければ、お手あげなのである。また、原子力は国家的機密の色彩が濃いため、資料の入手が学生ごとき立場では困難であるといった点があった。この二点は作成中、しばし

ば私を悩ませた事柄である。

自己の文章力に対して、疑問が生じたことが、この時ぐらい高くなったことも他になかった。すなわち、これほどの長文になってくると、ふだん書くようなレポートと異なって、非常に考えさせられるものであった。

とにかく、書き終わっての後悔は後をたたないものであるが、一応精一杯やってみたつもりである。特に注意したのは、普通の人にわかるように、かみくだいて説明しようとしたことである。わかり易く、をモットーにしたわけである。

卒論に対して後輩の人に言うておきたいと思うことは数点ある。忠告として聞いていただきたい。

まず第一に、題目設定を迅速に行なうこと。第二に、資料の数量を考えておくこと。第三に、章別の区分構想を行なって、章別に書いてゆくこと、だから簡単に書ける章から先に書いてゆくことが望ましい。第四に、下書きに時間をかけず、後の見直しに時間を取るように早めに骨組みを作っておくこと。以上、どこかの本に書いてありそうなことであるが私が自分で作成してゆくにつれて、痛切に感じたことばかりである。もう一つつけ加えておくとすれば清書に関してである。この清書というものは、考えているよりも、かなり多くの時間をかけさせるものである。事実、私もこのために二週間位を費してしまい、正月もろくに過ごしていない。特に図表を手書きして入れようとすれば、かなりの労力と時間をさくものである。この点はあまり知られていないことだから、つけ加えておいてもよさそうだ。

私の言うておきたいのは以上のことであるが、もう一つ残念に思うことがあるので、最後につけ加えておきたいと思う。

それは共同研究的な卒論という点である。大変難しい問題であると思うが、各コースの成員が集まった卒論作成はかなり意義のあることであり、かなりすぐれたものができるように思われる。結局、私がやったような卒論では、一人の力の無力さを感じさせるものであるが、上記のような方法はかなり新しい発展が生み出せるような感じがする。総合科学部の存在価値はそこにあると思うがいかがなものであろうか。このことは将来の総合科学部生に期待することにしたい。

今から四年前、いや正確に言うならば昭和49年7月に入学して以来、はや約四年も経ってしまった。

総合科学部も一世代が巣立ってゆこうとしている。総合科学部に期待をして入ってきた私のようなものもいれば、それぞれの事情で入ってきたものもいる。私に関して言うならば、かなり期待通りのものであったと思う。それは生意気かもしれないが、何かを学んできたという感じがあるせいだろうか。

わが学部は、これからも成長してゆかなければならないと思うし、そうでなければならぬ。これか

## これから卒論を始める人達に捧げる 卒論対処法三箇条

情報行動科学 洲崎 敏伸

大学に入って2年目位までは、4年生の卒業研究というものは、言わば大学生活4年間の総決算のようなものであり、最も苛酷な関門であると思っていた。風のうわさに、卒論に徹夜は付きもので、その日のためにもせいぜい身体を鍛えておいた方が…なんてことを耳にしたりすると、秘かな戦慄も感じていた。常に付きまとう第一期生の宿命というやつで、実際に卒業研究をやってみるまではその実体を知る術も無かった私達だったけれど、今、卒論を提出し終えて、過ぎた一年を振り返ると、卒業研究が、取り立てて言う程の感慨も無く、何てことの無いままに終わってしまった事に、ただ意外な驚きを感じている。

私にとって、卒業研究は苦にはならなかった。かといって、楽だった、というほどのものでもなかった。むしろそれは私の生活の一部として、いつの間にか一年が過ぎ、そして卒論が出来ていた。言うならば、とても気楽に卒論を終えることができたということで、これは当初の私の想像とはうらはらに、そしてかえってとても有難いことだった。

私は、夏から秋にかけて東京に国内留学して、卒業研究を行った。広島を離れ、見知らぬ研究室で生活する機会に恵まれた私は、卒業研究に没頭した約4ヶ月の間、公私共になかなか面白い生活を楽しみ、また夏休みを返上したおかげで、11月には卒論が完成していた。その後は広島でのんびりとみんなが卒業研究に振り回されている様子を見物していた。自分の卒業研究を思い返したり、みんなが一生懸命に取り組んでいる様子を見て一番思うことは、卒業研究は楽しけりゃそれでいい、という事である。

らの学部であることは否めない所であろう。そのためには、学生や教職員が一体となって築くことになるが、その評価は主に学生によってなされるものです。私はそれに貢献したかどうかは疑問であるが、以後続いてくる後輩諸君にははなはだ身勝ってではあるが強く期待をしたい所である。ただ健闘を祈りたい。

そして、人はそれぞれに楽しいと思うことが違うように、それぞれに違った卒論が出ていい。卒論で苦労したって、何の得にもなりゃしない。何かの資格が貰えるわけじゃなし、就職や進学に有利になるわけでもない。卒論はなるべく気楽に、そしてなるべく簡単に終るように努力するべきであり、それにはいくつかの心構えが必要である。なまけになまけて卒業研究を切り抜けた一先輩の生活の知恵として、以下の三箇条をこれから卒業研究を始めようとしている皆様に、そっと教えてあげよう。

### 1. たかが卒論とたかをくくろう。

こう思い込むことが、卒業研究を無事に終えるために、一番重要な点だと思う。そもそも半年や一年の間に、そんなにだいそれた研究なんて出来てないので、一生懸命ムキになってみても、後からバカバカしく思うだけ。四年間の締めくくりだからなんて思ったり、先生におだてられていっちょまえの研究者になったような気分になったり、とかくハッスルしがちだし、それも悪くはないけれど、身体を壊したらおしまいだ。結果はどうあれ、かろうじてまともなレベルのものが卒論で、あくせく仕事をやるよりか、研究室の人々のやってることでものんびり見物している方がよっぽど楽しいんじゃないかな。おまけに、ほとんどの人にとっては講義の無い自由な毎日が続くわけだから、大規模に遊びまくるにはうってつけの期間だということもお忘れなく。

### 2. にぎやかな研究室に入り込もう。

学生を多く持っている先生に付くと、先生の負担が増えて迷惑をかけるから……なんて考えるのは愚の骨頂。人数が多い方が酒を飲んでも楽しいし、煙草をせびる場合にも楽だ。おまけに、色々な話が聞けて楽しかろうし、知人をたくさん作っておくに

こしたことはない。自分の行きたいと思っている研究室に、どんな人間が何人くらいいるか、ということをよく考えて指導教官を選ぼう。一年間たのしく暮らすのと、涙に暮れるのでは、だいぶ違うよ。卒論のテーマなんてのは二の次で、要するに何だっかっていいんじゃないだろうか。

### 3. 卒論は早く書き上げよう。

早く書き上げて、しかもそれを極秘にしておく必要がある。何でもいいから早く終わっちゃった方が楽でいい。しかし、それとなくみんなに知られてし

## 卒論の思い出

環境科学 柏田 正博

僕が環境科学コースを代表して、卒論について何か書くようになりましたが、現時点での卒論の進捗は僕が最も遅れている方で、また卒論そのものについても優秀な環境の同輩ほどすばらしいものもできそうにありません。従って、これから僕が書きます卒論の風景でもって、環境科学コースの友人達の卒論風景を判断されないように読者をお願いします。また、僕は卒論そのものというより、大学四年間の一部として描き出したと思います。

思えば不思議です。高校時代最も嫌いな学科でもあった物理を卒論として選んだのですから。僕をこの道に進ませた究極の原因は何かと過去を振り返ってみると、高校時代に岩波文庫で読んだ物理学者、寺田寅彦の随筆集が思いあたります。その中に僕の大好きな「どんぐり」という小品がありますが、僕はこの作品に深い感動を覚えました。物質・自然を研究する人間の中に、豊かな人間性をみ出したからでしょう。物理教室に出入りし、多くの物理学者と一年間接してきた現在では、自然科学者は豊かな人間性に欠けるのではないかと、というこの偏見は半分だけおかしく思いますが、受験勉強で殺伐とした心境だった当時のことですから、いっそうそう感じたのだと思います。また当時、物理は僕を苦しめ、かつ僕の興味からも遠かったからでしょう。こういう僕の物理に対する心理的拒否感とは他の人の想像を絶するほどで、勉強する時はこの感情と闘うのに血の出る思いをしたのを記憶しています。後にわかったことですが、物理ほど入りやすく、しきいの高い学問はあまりないように思います。僕が就職を希望するようになり、教職の試験を終えて、少しはよい教師になるための勉強をしなくてはと、そちらの方の本を捜しているうちに、国立教育研究所の板倉聖

まうと、卒業が近いことだし、色々な雑用が舞い込んでくるから注意した方がいい。やれアルバム作りだ、やれ謝恩パーティーだとか、おまけに飛翔の原稿依頼までも舞い込んでくる。

卒論は、大学で学問をした、ということの記念碑である。しかし、記念碑にしてしまうことのできない数多くの貴重な体験を4年間の大学生活で学ぶことができた、という事も、忘れられない実感である。

宣さんを中心とする仮説実験授業とその裏にある科学認識方法の存在を知りました。本屋で頁をめくると、科学することは楽しいことであり、いたずらに難しく、興味をなくさせているのは従来の理科(物理)教育が悪いからだというような哲学、原則にぶつかりました。僕の自然科学に対する不適應の原因はここにあったのではないかと、中学校理科の教師をめざしている僕は、理科教育に批判的であると同時に重い責任を感じています。

さて、このように物理に不適應だった僕が卒論の指導をお願いしたのは、検原忠幹先生、藤井博信先生でした。偶然、今井知之君もいっしょであり、一年間楽しく、かつ彼から学ぶことも多くありました。僕の素質と知識からいくと、物理を選択することは無謀なことでした。しかし苦しいながらも安易な道は歩きたくはありませんでした。また、物理学は自然科学の根幹をなすものだという直感が僕をとらえたように思います。僕と今井君は、検原先生の研究室に机を置いて研究させていただきました。検原先生にしても、藤井先生にしても、屈託がなく、寛容で、人間味のある先生であったことは本当に幸せでした。僕の性分でもあって、ずいぶんと無遠慮にものを言わせてもらいました。しかし、両先生とも忙しい毎日の中での指導であったから大変であったと思います。

ところで、僕の卒論のテーマは「遷移金属水素化物の物性」です。遷移金属の化合物を真空状態の中に置き、温度と水素気圧を適当な条件にすると、水素を多量に吸収してしまいます。金属固体の中に水素が入っていくのであるから興味深い現象です。金属水素化物は近年世界的に注目されている分野です。日本ではまだ数ヶ所です。日本ではまだ数ヶ所です。日本ではまだ数ヶ所です。

ていないようで、まさに世界でも、日本でもパイオニアであり、未知のことばかりです。水素化物の研究は水素エネルギーの利用、特にエネルギー貯蔵ということの基礎研究にもなっています。

卒論に関して特に勉強したことは、卒論単位はほとんどありましたが、物性論の講義とゼミ、それに三年生諸君と勉強した量子力学の演習でした。好村滋洋先生には、熱学、統計力学のゼミを一年間ほど開いていただきました。また、藤井先生、理学部物性学科の博士、修士課程、四年生の人達とは金属水素化物の文献のゼミを行ないました。また、この方々には実験で親切な助言をいただきました。すべて多くの人に手を引いてもらってついていくという有様でしたが、物理学に少しなじんだように思います。また、この一年間ほど精神的に成長した大学生活はなかったように思います。卒論には直接関係はありませんでしたが、3年生の時、江田憲彰先生に論理回路のゼミを行なっていただいたことには感謝しております。以上は理論的な勉強ですが、多くの時間を費やしたのは実験でした。机にすわって本が読めないほどに動き回るの方が多かった様に思います。

十月頃、卒論の具体的な目標と未知を模索するため、藤井先生と予備実験をしている段階で、松原先生より“実験物理を卒業する学生は何か一つ装置を作らなくてはいかん”という教育的配慮から磁気天秤を製作する機会を与えていただきました。非力な僕には、まだ明確な卒論の核心に入らないうちに勢力を装置作りに分散させなければならないことは苦しいことでした。今後の学生、研究者が十分使えるようにするので責任も重いことでした。小さなことに莫大な時間を必要としましたし、独りで工夫を試みて前へ進むたびに、新しい問題が次々に出て困りました。結局二ヶ月程費やして、九割完成しましたが不十分に思っています。この間、物理の実験的研究はどんなものかを少し学んだように思います。しかし手離して喜ぶわけにはいきません。たくさん他のことを学べる貴重な時間を自分の非力のため費やしすぎました。十月以来、家路につくのは十一時以後がほとんどでした。時には徹夜することもありました。寒々とした夜気につつまれた、暗いが澄みきった空と明るい月を仰ぎつつ、歌いながら帰ったものでした。

誰しも、四年生になって考えなければならないことは、就職、あるいは進学の問題があります。最近

の就職難、そして総合科学部の知名度の低いことから考えて、就職は自力で切り開く覚悟でしたが、不安はありました。しかし、教師を希望するようになってからは、開き直った態度でおりました。四年間将来を自分らしく生きるにはどんな道がよいか迷うことがありました。自分自身を知るということは、誰もが果たさなければならない課題だと思いますが、僕が大学で最も追求したのは、まさに自己の探求だったと思います。いつからか深い穴の中に落ちたみたいで、どうやってそこから抜け出してよいかを知りませんでした。「夜と霧」(みすず書房)で有名なフランクルがNHKのインタビューに答えたのを記録した本がありましたが、その中で、現代人の不安の原因を「実在的真空」と「目的意識の欠如」にあると指摘していました。まさにこれは僕自身の問題を端的に示していました。しかし、現在の僕はこの2つの問題を個人的に解決する糸口をみつけたように思います。また、彼は「人間は他人に価値を教えることはできません。価値は自ら見出すべきです。人はどんな苦しみ、悲しみ、失敗の中でも生の意義を見出すことができるのです。」と答えていましたが、これは僕が最近やっと気づき始めた哲学でもありました。

ここ数カ月は卒論で一日がくれる毎日でしたが、僕の最大の楽しみは、本屋へ行くことと読書でした。僕は読書家ではないし、理づめの読書もしません。読書は心理学、哲学、宗教に関する本が多いようでした。僕はこの四年間、数多くの僕にとってすばらしい本に出合ったように思います。それは何かに導かれるかのように、本質的には一本の芯が通っているように思います。今日の僕があるとすれば、これらの本とその著者のおかげだと思います。今は忙しくて手を出せませんが、これから、何十年もの人生の中で、まだ僕の知らない数多くの人間とその思想に出合うのは楽しみの一つです。

最後に、卒論をすすめていくうえで、お世話になった数多くの人々には深く感謝しております。

(1月3日、日向からの船上にて)